

沖縄ん 建築紀伝

横断する眼差し

■ 2回 ■ 国場幸房(建築家)
高校時代、夢は物理学者

松尾の頃

一九四九年(二〇歳)頃に那覇に戻り、松尾の小さなカヤブチ屋に住んだ。

近くには、露天の中央劇場(現松尾公園)があり沖縄芝居や映画の上映があり、昼間の薬屋は子供たちの遊び場であり、神里原の子供たちとバッチ(メンコ)や玉グア(ビー玉)の勝負所だった。現在の松尾消防署から国際通りへ至る下り坂では、オート三輪車が転倒するのをよく見かけた。戦前に完成した武徳殿も戦禍をくぐり残っていて、警察の武道場として使われていて、友達同士で遊びに行き「柔道は受身から」とか言われ投げられてばかりいた。

絵も好きで時代劇の嵐勘十郎や片岡知恵蔵、ペーパークレーンの似顔絵も描いていた。小学五年時にはペンテルの第一回写生大会があり五年の部で二等をもらい、その後3、4回一等になった。音楽にも興味を持ち、沖映通り近くにピアノを数ヶ月間、習いに通ったこともあった。

一九五四年、復興著しい沖縄で一四歳まで過ごしたが、上之山中学二年終了後、兄幸一郎(当時、早稲田大学学生)の居る東京へ行き、区立池袋中学へ転校する。



やんばるの祖父と祖母1967年頃

ひとりで上京

一九五四年三月、一人であとせ丸に乗り三泊四日で東京月島棧橋へ着いた。船中、船酔いで寝てばかりいたが、何処からともなく「富士山が見える!」と声があった。富士山は見なければいけない!」と声があった。山並みを見回したが見つかからない。しばらくして雲海の上に視線を上げると、体験したことない角度に富士山の山頂が現れたので驚いた。さすが世界に誇れる富士山だと思った。

兄が迎えに来ることになっていたが、日が暮れても兄の姿はなく多少不安な気持ちになった矢先に現れた。その年、東京は二〇数年ぶりの大雪で、ピング・クロスビーのホワイトクリスマスが流れ、初めての雪景色を目の当たりにした。その当時、山の手線は全線一〇円で乗れた。落語で云うひと月一〇円(トコロテンひと突き一〇円)で食えた時代である。

兄と一緒に池袋に移り住み、学校にもすぐ慣れて、ヤマトンチュウのクラスメイトにも違和感はなかった。沖縄から来たという特別な意識は無かった。



城岳中1年、鉱石ラジオ製作中

早稲田高校へ進学

池袋中学から早稲田高校へ進学した。高校時代は応用物理や科学の世界に興味を持ち、夢は物理学者になることだったはず。苦手な科目は日本史で、そこでは資料研究のレベルであり通常の高校の授業スタイルではないようにおもえた。歴史は一〇、二〇点しかとれず、先生に呼び出され「國場君、君は沖縄か。それじゃー日本史が得意でなくてもしょうがないか」と言

われて大目に見てもらって助かった。
建築は学問だという意識はなく、アインシュタインへの蘊蓄を傾けていた

兄は早稲田大学の建築学科で吉阪隆正に傾倒してデザインの分野を目指し動んでいたようであるが、途中から内藤多仲教授の建築構造の世界へと変り、大学院は鶴田研究室にいて、時々広瀬謙二氏の住宅設計の構造のアルバイトをしていたらしい。

弟の僕に「おまえは絵が得意だから建築意匠計画に進め」ということになり、抵抗もしたような気もするが、結局、早稲田大学の建築学科へ入学、デザインの方へすすんだ。



早稲田高校入学後、池袋の長屋寮にて隣人たちと